昭和二十四年七月十五日第三種郵便物認可
昭和四十四年七月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第二四二号）

慈光

第二十一巻　第七号

目次

近角常音先生御法話……大字三右ヱ門……(1)
近角常音先生に死から救われた毛利君……柳瀬留治……(12)
こころのたび……児玉彊作……(15)
歎異鈔に導かれて……松村繁雄……(19)
われとわれらの救い……花田正夫……(22)

近角常音先生御法話

大字三右ヱ門（記）

註、昭和二十六年十月十八日、京都にての法話記録。

「念仏者は無碍（むげ）の一道なり、そのいわれ如何となれば、信心の行者には天神地祇も敬服し、魔界外道も障碍することなし。罪悪も業報も感ずることあたわず、諸善も及ぶことなき故に、無碍の一道なりと云々」

念仏者が偉いのでないのでありまして、如何なる不実（ふじつ）の者でもお見捨てない仏のご真実を頂いたものであるから、そのご真実に悪魔外道が頭を下げることとなる。天神地祇も障げとはならぬのである。

吾々如き罪深き者を捨てぬと仰せある仏のお恵みというものは有難いもので、この仏とはわれわれの如何なる悪しさをも捨てない御方なのであります。

念仏を多く称えるのが善いことではないのである。そのようなことでたすかるのではないのである。これは単なる話ではないのであります。

仏様のお慈悲ということは、現に事実として吾々のような何とも仕様のない者に声をかけて下さるのであります。

私は兄貴から「彼奴の我慢のやまぬが困ったものだ、可哀想なものだ」とこの言葉を聞かされたのでした。これは事実であってみれば無視することが出来なかったのです。

信心といえば誰でもすぐに有難く思うことのように考え易いのであるが、どれだけこちらが有難く思おうと力んでみたところで、そのようになれるものでない。肝要なことは仏様が吾々に何を云うて下されているかということをこのことをよく注意して聞かねばならぬのであります。

私にしてみますと、兄貴が私のことを心配して、彼は困った者だ、可哀想なものだと、私のことを気にかけて人に愚痴をこぼす程までに私のことを気にしていてくれている

このことを私に伝えたのは嫂（あね）である。嫂とてもそんなにまで意味をこめて私に話してくれたわけではなかったであろうが、これを聞かされた私としては、それ程までに私のことを兄貴が思うてくれているのかと気がついてみると、ここは素通りできなかったのです。

私は一応仏さまを知らせて頂いて喜ばせて貰うたのでありますが、後に変になって終いました。それでこのことを兄貴へ持出して聞いて貰ったのですが、その時兄貴は私のいうことを聞いて、お前の信心は間違っている、砕けているのはよろしくないとは云わなかったのです。

真（しん）のおまことなれば、吾々を憐れと思うて下されるばかりであって、吾々というものの心中は曇り通しである。それを悪いとは云わぬ、何時も云う通り「また間違い〳〵それだから仏さまはおあきれないと仰せ下さるのでないか」と云うてくれたのでした。

お前間違うているといわれても、現に間違うているのであるからこれは一言半句も文句がいえぬ。今さら信心頂き直せといわれてもどうにもならない。どれだけ間違うてもそれをいかぬというお慈悲ではない。間違うのはお前の性なのだから、どれだけお前は変になろうが、そんなことぐらいでビクツクこちらでないと仰せ下される。このお言葉はよくよく注意せねばなりません。

それは何故かというように信心というものは特殊のことではないのであって、そうでしょう、吾々の悪しさと、それを捨てたまわぬ仏様のおまこと、この二つのものしかないのでしょう。

おかしいお話をいたしますが、此方の大字さんは、この三月に江州の私の寺へ参って来られ、この話を聞いて下さって喜ばれたのでありました。しかしそう喜ばせて頂かれながらも、聞いたあとから変になって考えこまれるのでして、或席で私がお話をしていましたらば、その時は大字さんは居眠りをしておられた。目がさめても私が相かわらずお話申している。その話というのは、「また間違い、また間違い、それだからお見捨てないでないか」との話である。大字さんはこれを聞かれて、こちらの聞き上手でなかった、どこどこまでもおあきれない仏様のお真実であったかと、深く気付かれたのでした。その後私が東京へ帰り途に名古屋へ立寄りましたが、大字さんはそこへまでついて来て下されたことがありました。

こうしてお話申して居りまするが、どなたでもお尋ね下さればお話を申します。

仏様のお慈悲とは、寸分のまじり気のないものだという

ことを聞いて頂きたくてお話申したのでして、肝要なことは、如何なる悪しき者をもお見捨てないお慈悲である。それ程までに深い仏さまの思召しであることをお話し申したかったわけでして、ここのところをよく聞き取って頂きたいと思います。

何時までお話をしていても限りがないのですからどうかお尋ねを下されればお話を申します。大宇さんの今日のこの催しはこんなことであろうと思うてお話をいたしましたが皆さんどうですか、どうかお尋ね下さい。では一休みしてからにしましょうか。

座談会

（大宇房吉）「先程のお話で仏様のお慈悲とは、話ではなしに事実だとの仰せでしたが、私そこのところ、どうもピッタリ来ないのですが」

（先生）「そうではないよ。私はともかく兄貴から妙なことを云われたんですよ。これは話でなくして絶対の事実である。その人が私に面と向って言うてくれたのだからこれは話ではない。……それだから事実に眼をつけなくてはいかぬでしょう」

（大宇作之助）「先生がこうだと仰せある。そのことが事実だということですか」

（先生）「そうだよ。聖人がいろいろ仰せになった事実ですよ。世の中、実人生に通じているのですよ。これ空な世界のこと聞いたのでない。事実私も聞いた。……兄貴の云うてくれたことは、これは善くても悪くても事実であって、そのように云われてみると、ここは素通りができなかったのですよ。

人間各々、思想はいろ〳〵に考えられるのであるが、宗教の方は事実で行く、有難く思える、思えぬは問題外である。現に仏が呼びかけて下されている。そのことが事実であって、このことをよく〳〵注意せねばならぬのです。そうでなければ信仰というものが吾々の実際生活に力とならぬ、話を上手に受取る、下手にとるということは、それは問題ではないわけである」

（作之助）「言いつけというお話でございましたが」

（先生）「ああ…言いつけ、これは事実でしょう。言いつけということでよろこんだ人もありますよ」

（杉藤美代子）「あの…二種深信（にしゅじんしん）について一寸お話を」

（先生）貴女のききたいと思うところはどういうところかね、それを言って見ては」

（杉藤）「私の方は何も出来ない、丸々おまかせ（廻向という意）ですから…」

（先生）「それは往還廻向（おうげんえこう）ということで、往とは行くといって、吾々が仏のおまことを頂いて、それで仏にさせられる、これが往相（おうそう）の廻向である。

さて仏にさせられたら真実ばかりとなるのだから、吾々人間の有様を見てじっとしていることが出来ず、人生に還ってきて有縁の者を利益する。これが還相（げんそう）廻向ということである。このことを詳しくいえばむずかしくなるが要するに、吾々が獲信（ぎゃくしん）するのは往還二種の廻向のお蔭である。これがなければ吾々は救われぬ、仏様有難うございますと、お真実を頂いて遂に往生浄土に到らしめられたなれば、仏様有難いとなるでしょう。仏のお力で往生させて頂きこの上親兄弟など有縁の者を助けねばならぬとなるでしょう」

（杉藤）「私など自分さえよければよいと考えています」

（先生）「……すると自分達は誰のお蔭でお話を聞くことができたのか。往った人のお話で導かれるわけなのだから。この往還二種の廻向ということはこれは大変なことなんですよ。

この人生において、こちらの思いでなしに、向うの人のおもい、親切でものの考え方が違って来るものなので、こちらからでなく向うから来るのである。それによってものの見方が変って来る。吾々からの廻向でなくして、仏の御廻向によって何とかなるのである。ここが肝要なところである。二種の廻向、これは大変なことで、浄土真宗の思想というものは大変なものであろうと思うのである。

山口という地震学者があって、この人は禅宗をやった人しきりに修行して、その人がこのように云うたので、ある。〃吾々は自分のことなど考えるべきでない。今日でも明日も人の為、人類のためと思うて自分のことなど云うている暇がない〃と。私はこれをきいてびっくりしたのである。吾々はこの人と反対である、明けても暮れても自分のことしか考えぬ。ところが、このように云うているその人の実際を見ると、あべこべで、人のためと云いながら、自分のためしかやって居ない。人のため、何々のためと云えば真面目なことには違いないが、それは仏教の上から云えば、吾々にはそれが出来ないのである。」

（房吉）「私共ははじめから思わないのです」

（先生）「吾々はそんな立派なことが出来ない。聖人は虚仮不実のこの身と仰せられた。仏教を逆（さか）さまにしてしまわれたことは恐ろしい話である。」

（大前政吉）「仏教信者が神社へお参りするのはどうでしようか」

（先生）「他力の信者なれば一向一心弥陀名号でしよう。

専修専念、一心一向、ここを本当に気付いたら、一心一向になりますよ」
（大前）「願いごとでなしに、ただ頭を下げる程度はどうでしょうか」
（先生）「悲願成就……何とかいう和讃があったね。そうそう、悲願成就のゆえなれば、金剛心を得た人は、諸仏を何々せよと言うてない、弥陀の大恩報ずべし、と書かれてある、なかなかこのところはむずかしいね。
以前私の方へ訪ねて来た人が、真宗はやさしいと聞いたが、日蓮宗以上に頑固で驚いたと云うたことがあった。そらそうだよ、真宗信者は朝も晩も南無阿弥陀仏という て他をかえりみないからそのように見えるのだけれども これは頑固ではない。真のおまことに出遭うてみれば、これがひとつ有難いとなって、それこそ一心一向だよ」
（田川）「先生のお話を承って先生が私共のレベルまで降りて来て手を添えて下さるということ、これに気付かして頂いて有難いと思います、有難うございました」
（作之助）「蓮如上人の改悔文（がいげもん）に、諸々の雑行雑修自力の心をふりすてて一心にわれらが今度の一大事の後生助けたまえ……お文の筋読みとなりますが」
（先生）「改悔、……文字からして悔い改める。蓮如上人おんみずから懺悔のお言葉だから、もろもろの自力雑修の心をふりすててとなってくる。
私ははじめのうちはわからなかったが、今はこういうことだろうと思わせて貰っている。本当のことがわからせて頂けぬ間は、どう一心になるのかとなっておったが。吾々の仕様のないのを、それを憐れんでお見捨てないのはこの一仏ばかりであるとなってみれば、この一心は吾々の一心ではなくして、仏の一心有難いとなって、頼みたてまつるのはこの方ばかり、それこそ一心にたのむとなってくるのである」
（佐平治）「その次のところはむつかしいですね。たのむ一念のとき云々は」
（先生）「……そこがね……」
（佐平治）「そこはどうしてたのむのかと、私は三十年聞いていて、私の心に分りたい、私の方からハッキリしたものが頂きたい、これで困りました。
しかし、今年の三月、御自坊で、また間違い〳〵のお話を承って、これは実に嫌いな言葉でありまして……それは、先生は一旦分ったと思うても、また間違い〳〵と仰せられますが、先生は一旦分ったお覚えがあられる故、その次のまた間違いが素直にピンとお受け容れになられますけれど、私など初めから一旦も分っていないからそこを通れません」

（先生）「通れなければ、そこチギレばよいでないか。そこを取って終えばよい。一旦分っても間違うのではその信心何もならぬ、そんなもの駄目だい」（ここ重要点）
（佐平治）「一旦分ったのを勘定にいれない？一旦分ったものなればよろしいが、初めから一旦も分って居らぬ、通過したことのない者はそこを通れません。ここの所で困っている者は多いでしょう、これは私一人ではありません。ここはどういうものでしょうか。私は一旦分っても間違い〳〵この方はよく分りません、ピッタリと頂けませんが、またしくじり〳〵の方はよく分ります。……応信如来如実言と先生から仰せ頂き、又しくじり〳〵と先生から仰せうけました。それまでは、それを聞けば分りましたと御挨拶せねばならぬとの思いばかりでありましたのに、あの時は素直に聞かせて頂いて改めてご挨拶申し上げる要のない気持がいたしました。先生の御一言を承って三十年来ああこう分りたいと人をうらやましがっていたのに、その時は私の分りたい心持は、私だけの満足感であったのか。現に間違っている者に仰せ下さるご一言は私の胸に突きさされたような思いがいたしました。七月上京の時、先生から、君のはしくじりののっぺら棒と、仰言って頂いて楽になり心強く存じました。一つとしてしくじらぬはない、こういうことでございました」
（先生）「とも角、あれは有難いところのお言葉だがな」
（佐平治）「そののっぺらがあの七月に帰宅しましたら同類が来ていましてね。それを見て頂きたいと思いまして
—佐藤強三郎氏よりの来信、先生ご覧遊ばされる。—
『彼奴の我慢のやまぬが困ったものだとの兄貴のいうていたことを洩らした嫂の一言有難かった。それだからおあきれない御一言、以上拝写終り。越後、佐藤強三郎』
「それは七月二日附のお手紙です。私の上京中の来信でありまして、私は最後のところが有難いのです」
（先生）「三月江州よりの帰り逃、名古屋へ立寄った。あの時花田君のところで、君に何を話したのかね。わしは全く記憶がないよ。」
（佐平治）「何でしたか、あの時の話は……。
それでは申上げます。先生は何時も、又間違い〳〵と仰せでしたが、私は江州では、又しくじり〳〵と承りました。それが花田さんのところでは、又やりそこない〳〵となっていました」
（先生）「あの日、兎も角何を話したのやら眠たくて〳〵仕様がなかった。花田君の所を発ちしなにお名号を書いてくれという。困ったなあと思ったが書いたところ、もう一枚何ぞ書けと乞われて弱ってしまったよ」

（佐平治）「花田さんの所と江州でのお言葉は違いますが意味は一つ、有難かったです。フラフラ居眠りながら聞かせて頂いていましたが、先生は聖教をお読みになりお話をしておいでした。
自分の信仰の根本は兄貴から云い聞かされた、又間違いまた間違い、それだからお見捨てないのだと。これだけがわしの信心の要（かなめ）だと聞かせて頂いて、私はそれが大変有難かったのでした。」
（先生）「花田君の所では眠くて〳〵参ったよ。晩よりも昼の方が有難かったとしきりに礼をのべられたが、わしは何を話したやら記憶がボヤケで思い出せない。あの時聞いたという人が上京して来て、午後のお話が有難かったと云われたが、当の私は何を話したのやら覚えがないのだよ」
（佐平治）「二人で聞きました。たしかその人でしょう。又やりそこない〳〵のお話でした」
（先生）「そうだよ、わしはこれだけしかない」
（佐平治）「そうでした。これだけしかないとの仰せ、私は有難かったです。私は三十年来聞いて、又しくじり、又しくじりのお話を聞いても、これは長年聞いた者の特有性でこうだ、ああだとなり易いのです。中々本当のところへ出にくいのです。然るにあの一言、またしくじりまたしくじりそれにお呆れ下さらぬとのご一言をきき、先生もそれより外に何もないと聞かせて頂いて、もう私のは朝から晩までしくじり〳〵ののっぺんたらりしか無いにつけ、有難いと思いました」
（先生）「そうですよ。彼奴の我慢のやまぬが可哀想と、これを聞いた時は、他の人の心の有難さというか、それをはじめて知ったのですよ。
私はこれだけの言葉を聞いたのであるが、多少とも私のことを思うて心持を運んでくれるその人は、私の我慢のやまぬをいかぬと云わずに、蔭で愚痴をこぼす程までに心配をしてくれている。こちらはもっと我慢が出ればよいぐらいに思うているのに、それを文句いうことなく、我慢やまぬが可哀想というてくれるとは意外であった。我々日常人生生活において、人の心の有難さ、親切を無視していることが無いか。
私は自分のことばかり考えて人というものは何を考えているかということを知らずにいる。随分とこちらのことを思うてくれているのに、私はそれに気付かずに無視していることが多いかも知れぬ。
それ故、それ以来というものは、私は世の中にこちらの気のつかぬどんなことがあるやも知れぬと思うようになった。うかつに云えぬわいと考えるようになった。

東京での話ですが、或人がよくないことがあって刑務所へはいり、出所してから私の所へ尋ねてきた。入所中に仏の御真実を聞かされて、それまでは、仏さまの御真実など、あるなどとちっとも思うていなかったのに、何とも有難いことを聞かされたと喜んでいた。その人は出所してから国元へ帰り母親に会うて、又東京へ帰るに際して母親が財布を出して、これを持って行けと云うてくれる。中味は僅かに三円八十銭しか入っていない。これは母親にとっては大金であるが、その人にすれば知れた金額である。いらぬと云うても母親はくれようとして承知せぬ。遂に貰って帰り途、汽車の中で母親のことを思うた。僅かな金なれどこれは母親の有り限りの金である。親のそれを呉れようとした有難い心持に気がついたのである。たった三円八十銭なれど、この金にこもる親のまことの心、これは僅かに三円八十銭なれどこれを呉れる情けの人は百万円あれば、その百万円有り限りを呉れるだろう。実に親は有難いものだと語った。
私はこの話を聞いてびっくりした。そういうものかと聞いたのである。その人は大変に喜んでいたが、その後私の方へ来ぬようになった。その人は喜んでいたのであるが、親のまことの心持に感激していたのだから、その喜びも日が経つにつれて消え失せてしまったものと思う。
私の場合は兄貴から云われて、そのような親切があるのかなあとなって、それが仏教でなければそれしまいで終ったかも知れぬが、私の場合は仏さまの御真実へと飛んで行ったのである。これは長年兄貴の傍に居て仏教で育てられたお蔭であると思うのであります。
私自身にして見ますなれば、どこが一番有難いかと申して見れば、思いもかけぬ人の実意ということを知らされたことであります。
法は平素人の親切を忘却してはならぬ、覚えておかねばならぬと律法主義に考えていたのである。人がしてくれたら仕返すという風に、どこまでも五分五分の考えである。これで人の好意を突張っていたのである。これは忘恩の輩（やから）と申すべきである。こういう浅間しい自分と、かく気付かして頂いたのも、長年仏教の御縁があったお蔭と思わして頂いて有難いですよ」
（佐平治）「それから信心の根芽というお話を承って有難うございました。根があるから芽が出るということ。又もう一つ、あの会館の応接間で先生が或人に、誠意の何ものかを知らぬ人であると仰言った時は、私自身がお叱りを受けているような感じがいたしました。——佐平治声を大きくして——又もう一つは、罪悪ということは人様から受けた親切を親切と思わず、これを蹴散らかして

いる程大きな罪悪はないということでした。これを聞いた時はびっくり致しました」

(先生)「私にすれば、あの人の云うのは面白くない、こうだとなってあらゆる人の親切を蹴散らかしていたことを知って、自分はとてもひどい者と思うた。人に腹を立てさせるこれはよくない。仕事を失敗する、これは自分のこと故よいが、対他関係において、人の親切を無にするということは、これ程よくないことはない。罪悪とは何か、自分の仕事なればそれを真面目にやればよい。これは自分のことだからよいが、対他関係に於いて、人の親切を無視して蹴散らかしていたということは許し難いというべきである。このことは何ですよ、弥勒菩薩以来のものだろうよ、とても人間はひどいものですね……」

(杉藤)「私は今の誠意ということが分りません、もっと詳しくお話をして下さい」

(先生)「そうですか。そうでないですか。人を蹴散らかして俺が俺がと自分を立てるということはひどい事である。そんな法は無いと思う。蜜柑箱の喩え話ですが、蜜柑箱の中の蜜柑が押し合う。お前あちらへ寄れという、相手の蜜柑がお前こそ遠慮せよという。お互い同志が押合いごっこをする。そういう具会に他を押し出していることが善いことか悪いことか。それを人様はどのように見ていなさるかと思うのである。自分ばかり善くて人はどうでもよいとの考えはどういうものか」

(佐平治)「人はどうでもよい。自分さえよければよいと思うていますが」

(先生)「そうだよ。人の幸福を願わぬ者を天神地祇が見ていて、彼奴は欲ばりだから可哀想だとは思うまいよ」

(房吉)「商売の場会は客もよし、自分もよしとなりますが、同業者に対しては排他的となります」

(先生)「そうだよ、心得ねばならぬでは自分が立たぬ。自分を立てねばならぬ実生活の中にありながら、そうだよ、なぜ人を立てて自分を控えねばならぬと考えるのかここで誰でも行き詰らざるを得ないでないか。こうなるとどうしても本願力不思議を仰がねば立たぬではないかということで申して見たいのである」

(佐平治)「二種深信ということについてお尋ねいたします」

(先生)「あれを云うた意味はこうなんですよ。機(き)の深信では、我身の浅間しいことを自覚する。法の深信では、彼の阿弥陀仏の願力に乗じて往生すると深信する。これは面白いですね。一方では往生すると願う、一方は自分は罪深いもの、助かりようのないものと深信する。これをうまく言えるかどうか知れぬが話して見よう。

吾々自身は罪深い者という、罪深い者なれば、これは地獄行きである。しかるにこの吾々が極楽へ参らせて貰うのだと如何程言うて居っても限りがない。

野々村直太郎(浄土教批判の著者)という人があって、この深信のことを矛盾撞着(むじゅんどうちゃく)していると言ったが、一応はその通りである。

即ち罪が深ければ助からぬ。然るに一方では絶対に助かるものであると深信するということは矛盾しているという。これは一応そうである様に思われるけれども、罪の深い者が助からぬでは仕様がない。その仕様のない者を憐れんで下された仏が特別の願を建て、その者を迎えとって下された。そこで仏様の普通ではあり得ない、特別不思議のお慈悲でましますことを頂かねばならぬのである。それを取り落して終っては、ここの処がさっぱり意味をなさぬものとなってくるのである。

云いたいことはここのところであって、内の学舎の学生など若い者は、念仏など分る分らぬと理論的に云うのであるけれども、何と云ったとて、この深信ということ、是程確実なことはないではないかと思う。これが分かれば信心のことは分かる分からぬということを詮索することはいらないのでないか。

それはこうなんだよ。兄貴は私の我慢のやまぬを見て、それ故に可哀想というてくれている。私はこれを聞いて不思議なこともあるものだ、変なことを聞かされた、妙だ、と人の親切と云うものにチットばかり気付きだしたのである。

罪深いと云うているが、吾々罪悪感などを若い者はかれこれというのだが、私など兄貴の云うのを聞かされて、その後、仏書を読んで見て、何故仏がそれ程捨てないのであろうかと思うてみると、お前の罪深いのを捨てないとの仰せであったことを分らせて貰うたのである。どうしてもここは本願力不思議ということを取り落としては仏さまの救済などということは、おおよそ意味の分らぬものとなってくるのである。

それ故、本願や行者、行者や本願と仰せあるのである。吾々罪悪の行者のある限り本願が出て来なくてはならず吾々の罪悪深重なることが本願のある証拠というべきで極端に云うなれば、吾々あって仏在りとまで言えるのである。仏が存在するせないの詮議よりも、吾々罪悪のある者の居ることで論議の余地がない。『仏願の生起本末(しようきほんまつ)を聞いて疑心あることなし、これを聞という』と、お前が罪深い故にお前を助けるのだとなってくるのである。仏願の生起本末とは、吾々罪悪の

者をお目当なのである。聖人の常の仰せ『弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業を持ちける身にてありげるを助けんと思召したちける本願のかたじけなさよ』このお言葉は、聖人が御自身の日常生活を指して仰せられたものである。出来そこないを捨てぬとのお慈悲である。大慈大悲である。この聖人の仰せは『自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に沈み常に流転して出離の縁あることなき身と知れ』との善導大師の金言と全く一つである。唯円房が仰言るように、これは機の深信である。

私はこの言葉を日常生活にもっていく。聖人の信仰をよくよく頂いて見れば何としても日常生活の上に仏のお慈悲を頂きなされたものと思われる。このように信仰は生活の根底になってくるのである。それ故、吾々は自分が浅間しい人間とあって見れば欲もほど〳〵となって来ようし、人をどうしても突き除けてともなるまいでなかろうか。明日の一食すら無い者も、お見捨てない御真実に息をふきかえらせて貰って、また明日は明日と、そこに踏み張りを得させて貰うのである。そうでなければこの他力の信仰が要をなさぬではないか。ここのところを強く申して見たいのであります」

（房吉）「我々罪が深いということを自覚出来ませぬ。然るに先生は人の親切厚意を無にするということは、これ程の罪悪はないとの仰せですが、そこのところを今一度お話を」

（先生）「そうだよ。人の親切を無にし仏さまのお慈悲をもそれ程有難いと思わない。それ程に吾々は忘恩背徳の者である。忘恩背徳というものはひどいものと思う。罪の深いということを知らぬということはね。私は兄貴にこれだけの恩徳をうけていながら忘れている。恩をうけているとは思わない、実にひどいものですよ」

（佐平治）「機法二種の深信のお話を承って有難うございました。こと新らしくお聞かせにあずかった思いでありました。有難うございました」

（先生）ひとりごとのように、

「仏の救済ということは一応や二応のものでない、このことの分るということは大変なことである。有縁の善知識が居なければ容易なことで仏を知ることは出来ぬであろうな……」

大字佐平治宅にて。

☆　☆　☆

常音先生に死から救われた毛利君

柳瀬留治

近角常観、常音両先生は御体験になった信念からほとばしる情熱を以て、数知れぬ人々を信仰に目覚めさせ、人生に立ち直らせられた。求道学舎や会館で働いていた人も、先生を信じ尊敬の余り先生の手足になって働いたことであった。碓井半二君の生涯もその信一つで貫いた。先生を尊信し、久しく会館の書生の役をした毛利佐太郎君、西村三喜雄君もそうであった。

大先生は我々の金城鉄壁の妄を打ち破る大砲だといわれ又常音先生は我々の心の隅々まで見抜いて余すなき機関銃だとも云われた。そして我々の行き悩む生活のこと、家庭のこと、むずかしい病気の相談に乗って治癒に導き、幾多の人を救われたことである。毛利君は正しくその一人であった。

毛利君は書生役をし私塾したのは大正の中頃か、昭和の初め頃からと思う。次いで西村君は、大戦が苛烈になり、常音先生が郷里に疎開された後、単身お留守の任に当って会館を守っていた。共に今は故人になってしまった。

今、毛利君が先生により死から救い出されたことにつき常音先生大信念による大英断を思い、先生を追憶したいと思う。

当時、常観先生の講話は毎土曜の午後は九段の説教所、その夜と日曜午前は求道会館、月の十五日慶信会とお話があった。講題を前もってお書きになり掲示するよう、又新聞社にも伝えるよう、先生自ら紙片に書いて毛利君に渡されるのであった。毛利君はそれらの紙片を大切に保存していた。又大震災の折のこと、大奥様のお妹様の及能様一家が外国から船で着かれて上陸不能のまま安否が知れず、又大先生の従弟の竹鼻さんの小田原の住居の安否など、両先生が心配された。それを見た毛利君は自転車を馳せ、京浜、湘南の街道筋の町々が倒潰していて燃えている所もあり、通りぬけるのに苦労し、両家の無事をつきとめて帰った。これは日頃先生により念仏に安心し、命がけで果した

ものであろう。

其後毛利君は家庭をもったが、日曜には会館に参り先生のお話をむさぼり聞いていた。たまたま昭和八年の夏中耳炎に罹り、慶応病院に入院し幾度か手術したが、病勢次第に悪化し夜も眠れず、食欲を失い、脳膜炎を起し、部長の小此木博士から死の宣告を受けるに至った。

これを常音先生は聞かれて、是が非でも救ってやらねばと、専門の方々特に田所先生に泣きつかれた。元々田所先生は東大助教授を捨てて真の仁術で立たれた方で、常音先生は全幅に信頼し、先生に生死を托して悔いなしとしていられた。

一方慶大病院へは自宅で死なせたいからと退院を申出、家族にも承知させ、寝台車で神田の賀古病院へ入ることになった。何分にも危篤の病人のこととて、信者で看護婦会長として久しい名倉夫人が注射一式を携えて同乗した。夫人の表情には、この危篤の病人を無理に引出される常音先生が無謀すぎはせぬかと危ぶまれる様子がうかがわれた。

ところが田所先生は診察されるや、身体に自然の治癒力をつけるにありとされ、食べたい物はと聞かれ、握り鮨と聞くや、それを先ず与え、睡眠剤をもって熟睡させられたすると不思議にも意識もはっきりとし、悩膜炎の危機を脱し、漸次恢復して数ケ月で退院した。

かねて常音先生は毛利君の兄に約束されていた。「病人の生死にかかわらず田所先生に対し、わしの示すだけの謝礼をせよ」と。それが本人が治ってしまうと惜しくなり、出そうとせず、常音先生が怒られたことは、すでに慈光に書いたので省く。

毛利君は大先生直筆の紙片集を巻物にし、常音先生に奥書きを依頼してあった。先生は同君の退院の記念に、その喜びを書かれた。その巻物を開くと、先ず大先生の電文に

「アクマデオミステナキオジヒナレバアンシンネンブツセラレヨ、チカズミ」があり、

日曜講題、善悪共に翻えす。
十五日朝、聰明善心。夕、難遇難聞。
十六日朝、邪正の道路。
十二日、真心徹到。
十三日、凡夫直入。

等々、三十数枚の紙片が一巻にされ、大先生の躍動をもつ筆致が見られ、大先生の説かれた御精神の躍如としたさまが見られる。

その巻末に常音先生の奥書されているのを拝読し、先生のお心を更に深く感じた。

この巻は毛利教契が家兄を尊信の余り、教契が予の許

に在らせし間に、自然に教契の机の引出しにたまりし家兄自筆の断片零碎を集めて作成せられしものなり。この巻なりて後、今年九月初より教契中耳炎に冒され、十月中頃に至りて病勢増悪、慶大病院に入院せらる。而も脳膜炎を起して同月二十六日に於ては、最はや回復の見込みなきを云い渡さるるに至れり。よって予教契の家族の方々と相はかりて、即夜、教契を賀古病院に移して田所先生の治療に託す。然るに治療始まりて意外にその夜を転機として忽に快癒、まことに不思議の矜哀（こうあい）によるものか。予教契治癒記念の為に、聖人、信巻の文を書しておくる。曰く、

難化三機、難治三病者、憑大悲弘誓帰利他信海、矜哀斯治、憐憫斯療、喩如醍醐妙薬療一切病。

よって本帖を名けて醍醐帖と為す。

昭和八年臘月二十一日　　常音謹識

とお書きになってある。毛利君が小此木博士から死の宣告を受けた。それを常音先生が非常手段をもって救われたのである。

表は田所先生の徹した仁術によるものと見られるが、常音先生は「まことに不思議の矜哀によるものか」と申していられる。この「か」は疑問の「か」でなく、感嘆の「かな」の意にとられる。全く大悲の矜哀に他ならないのだとの仰せである。それで教行信証の信の巻の文を抄出されて矜哀の程を示され、その記念としてこの御書片帖に「醍醐帖」と題されたのである。ここにこの御文を訓読すれば

難化（なんち）の三機、難治（なんち）の三病は、大悲の弘誓をたのみ、利他の信海に帰すれば、これを矜哀して治し、これを憐憫して療したまう。たとえば醍醐の妙薬の一切の病を療するが如し。

この御文の条は、涅槃経を引かれたもので、阿闍世王が父王を殺害して後、自身の罪悪に苦悶し、身に瘡熱を発し狂わんばかりなので、耆婆（ぎば）は釈尊に救いを求められるようにとすすめ、お連れして釈尊のもとに至った。阿闍世は釈尊の遣る瀬ないお心に接するや、立所に信心歓喜し、病苦忽ちに癒えたことが説かれた御文の後半にあるものである。

難化の三機とは、仏のみ心を聞かせても到底耳を傾けない三種の人のことで、謗大乗（だいじょうをそしる）と五逆と闡提（せんだい）とで信不具のものだという。それを難治の三病だといわれ、そした者が大悲の弘誓によりその病を治して下されるのだ。それは恰も醍醐（乳酪を精製した滋養物、即ち大悲にたとえて仏の慈悲の妙薬で一切の病を治すのだ、といわれたのである。

恐らく常音先生は、毛利君よ君が死から救われたのは、

実は仏は矜哀の余り田所先生をして醍醐の妙薬を与えられしめたのだ、との先生の深い信仰からのお言葉だと思われる。

毛利君は大戦の後、勤務のかたわら食糧増産に体を労し胸を病み、昭和二十三年の暮、遂に世を去り、常音先生は二十九年八月六日に御逝去になり、もう十五周年となったが、まだそこにいられる心地がし、思えばすぐお顔が見えて来、お言葉が聞えて来る。お浄土の先生のお心が通じて来るのだろう。そして先生は「今も君はつまらぬことを考えているなあ、念仏一つだよ」と仰言っていられる気がする。先生いつも〳〵お心にかけて下さり、誠に忝けなく存じます。

こころのたび

児玉彊作

私は二十歳前後の頃から折にふれて感じたこと、考えたことを書きとめている。そしてそれに〃心の旅〃と名をつけている。

○

人里遠く離れた山奥に一輪の野菊の花が咲いている。通りがかりの村人が憩いのひと時、その花をふりかえるにすぎない。その花の美しさは、都の雛段に飾られている菊の花にくらべて、たとえいちじるしく劣ろうとも、野菊としてはその全生命をその花にその茎にその根にそそいでいる。そのくらしはささやかでも、野菊のように全生命を打ちこんで生きて行きたい。全生命を打ちこんで生きているという自信をもった生活がしたい。

○

ある検事の告白談が雑誌に載っている。

彼がまだ東京のある区の検事局で検事をしていたとき、ある日のこと、万引をして送局されて来た一人の女を彼は

訊問した。

〃悪いことをしたのですからどのような刑を受けてもやむを得ません。唯子供のことを思いますと……〃

と、彼女の涙ながらの訴えを、罰の軽減を求めるいつもの手と考えて、彼はその女を起訴することにした。彼女は裁判で懲役八ケ月を言渡されて入獄した。

間もなく彼は東京地方検事局に栄転した。そして老人の孫殺しという事件の公判に列席することになった。

その老人の告白によると、妻に早く先立たれ、男手一人で息子を育ててきた。その子も成長して就職し嫁をとり孫ができた。〃もう年をとったから仕事をやめて孫の世話でも〃という息子のすすめに従って老人は店をたたんで息子の世話になることになった。

ところが、程なく不幸にも息子が風邪から肺炎をおこして死んでしまった。もう一度店を始める気力は老人にはもうなかった。結局彼等の生活は嫁によって支えられるよりほかなかった。嫁は気立てもやさしく一生懸命に働いてくれたけれど、女のか細い腕では三人の粥口を支えるだけでも容易ではなかった。彼女は万引をして刑務所に入れられた。

老人はやむなく孫と共に甥の厄介になることになった。甥の家の生活も楽ではなかったので、彼等は厄介者として冷遇された。そこで老人は考えた。——嫁は刑を終えて出て来ても、自分と孫がいると生活の苦しさのため又罪を犯すかも知れない。もし自分と孫がいなければ嫁は再婚して幸になれるだろうと。そこで老人は孫を荒川堤に連れて行って川に投げ自分も飛びこもうとした。そして、幸か不幸か彼は通りあわせた人に抱きとめられた。そして、殺人罪として法の裁きを受けることになったのである。

検事は老人を可哀そうに思って、三年の懲役を求刑し、刑の執行については、裁判官の方で猶予されて異存ない旨を述べた。老人は孫を殺して、生き延びたくはないと、むしろ死刑を願った。けれど裁判長も、検事の意見をいれて、三年の懲役と二年の執行猶予を言渡した。

それから数日経って検事は、新聞記事によってその老人が同じ荒川で身を投げて死んだことを知った。もし執行猶予にしないで刑務所に入れておいたら老人は死なさずにすんだかもしれない。けれど孫を死なせて、自分だけが生き延びていることは、老人には耐えられなかったことであろう。検事の心は復雑であった、せめて老人の菩提をとむらおうと検事は老人の墓へ詣った。

墓の前では一人の女が泣いていた。その女がかって、万引の罪で彼が起訴した女であったことをそのとき彼は初めて気づいた。法の裁きに落度はなかった筈である。けれど

も、彼女を刑務所に入れたために、彼女から父と子とを奪ってしまった。もしあのとき彼女を刑務所に入れなかったら、二人共に死ぬようなことはなかったかもしれない。…法の裁きのむつかしさを検事はしみじみと考えざるを得なかった。

○

広島県

夏休みになってから、毎朝私は裏の灰ケ峰に登っている四時頃起きて家を出る、そして暗い山道をてくてくと登って行く。

五合目に達した頃、夜はほのぼのと白みはじめる。谷間のせせらぎで顔を洗う。そして東に向って深呼吸する。

朝霧の中から展（ひら）けてくる瀬戸の海と島々、その美しさは拙ない私の舌や筆では勿論あらわせない。私はそれまでけわしい山道を登って来たときの苦しさを忘れて、その美しい景色にしばしみとれるのである。

本当の楽しみは、苦しみを越えていったところに得られる、私はそう思う。私達は苦しさを通して深められる、苦しみによって磨かれる。

○

〃渦に巻きこまれたら、その渦に身をまかせるべきで、渦から逃げようとしてはいけない〃と、音戸の瀬戸である人から聞いた。〃一旦渦に巻きこまれると、どんなにもがいても渦から逃れることは出来ない。もがけばもがくだけ体が疲れ、遂には命を失うようなことになる。でなくて、そのまま渦に身を委せていると、やがて底へとどいて浮き上がってくる〃……。

そのことの真偽については私は知らない。けれど私の処世訓として、私はこの話を興味深く聞いた。私達は自分が遭遇した不幸から、逃避しようとしないで、その不幸にまともに向うべきである。そしてその不幸を幸に転回する途を考えるべきである。〃身を捨ててこそ浮ぶ瀬もあれ〃という諺もある。

（編者註）良寛師の言に「災難にあう時節にはあうがよろしく候。死ぬ時節には死ぬがよろしく候」と。

○

養父のところへよく出入りする株屋さんがいる。前から私は彼を株屋さんにしては変った人だと思っていた。〃私は若いとき金に苦労しました。それで株で儲けて気の毒な人にあげようと思います〃彼はそういったことがある。全く一面識もない人に快く一夜の宿を貸したこともしばしばあるらしい。

今夜、私は彼と親しく話すことが出来た。偶々彼はこんな話をしてくれた。

「私がまだ苦労して、大学へ通っていた頃のことですが

或日のこと、私は橋のたもとで餅を売っていました。その橋はすこし弓形になっていましたので、荷車を引く人は苦しんでいました。見るに見かねて、私は何台かの荷車の後を押しました。

しばらくすると数人のならず者がやって来て〃お前の商売は何か〃ときました。私は〃餅屋である〃と答えました。〃餅屋なら餅屋らしくしておれ〃そういうなり彼等は、餅の入っていた屋台を蹴とばして、私を袋だたきにしました。

なぜ、このような仕打を受けなければならないのか、私にはまったくわからなかったので、私は引揚げて行く彼等のうしろから呼びとめました。すると〃お前の職業は何か〃と同じことを聞くのです。私は〃さっきから餅屋であるといっているではないか〃と答えました。〃餅屋なら、餅屋らしくしておれ〃彼等は又同じようなことをいいました。〃さっきからあんた達は同じことをいっているが、その意味がよくわからない、それはどういうことなのか。どうしてこんなことをするのか〃と私は問いました。

〃俺達は困っている荷車の後を押して駄賃を貰い、それで生活している。今日はお前がいらぬおせっかいをしているので、俺達の手には一文の金もない。今夜お米を買うこともできないのだ〃と彼等はいいました。

そんなことをして生活することがよいかどうかの詮さくはここで措くこととして私は悩みました。私は先ず、大学の教授に悩みの解決を求めました。けれど私が満足するような答は得られませんでした。私は一灯園にも一ケ月通いました。キリスト教にも教えを乞いました。〃結局何も解りませんでした〃」

と彼は最後にいった。けれどこのことについて淡々と語る彼の言葉の中に、又他の問題について話してくれる彼の言葉の端々に普通の人にはみられないある種の悟りにも似た境地を汲みとることができるように私には思われた。

苦しむことは人間を育ててくれる、苦しむことは、決して無駄ではない。

（三十七年一月三十一日）

ゲエテの格言

人は他（ひと）からあざむかれるものでない、
自分で自分をあざむくのである。

○

或る人を賞讃するのは
とりもなおさず自分をその人と同列に置くことだ。

○

ランプが燃えれば油煙が出る
ローソクが燃えれば蠟が流れる
滓（おり）が無くて清浄に輝くものは
天のひかりのみである。

歎異鈔九章と私

（かくのごときわれらがため）

松村繁雄

私は七十三才になりますが、よくもこの火宅無常の世を生きのびたことであり、その上に、今はあい難い仏法にあうてお念仏させて貰うておりますので、何の不足もない筈不足があってはならない筈であります。

しかし実際はどうかというと、口には念仏をするけれども踊躍歓喜のこころもなく、道理の上では御恩を思うて、「腰かけた石を拝んで遍路立つ」と言うように、日々を拝んで暮したいと思いながら、それはただ観念であって、拝むような心はどうしても起らず、来る日も〳〵「思うようにならぬ」という愚痴、セツナイ思いの中に夢うつつの日を過しているばかりであります。そのうちにやがて無常の風に誘われて、空しく愚痴のまま逝かねばならぬとは、まことになさけないことでありまして、全く身の置きどころもないのでありますが、その私を引き立てて下さるのは、歎異鈔九章であります。この教えがありますので、今日を幸うじて生かされております。

唯円房の、念仏は申し乍らもよろこびも、いそぎ浄土に参りたい心もおこらぬにつけて聖人にお尋ね申した時

「親鸞もこの不審ありつるに唯円房同じこころにてありけり。よくよく案じみれば天に踊り地に躍るほどに喜ぶべきことを、喜ばぬにていよいよ往生は一定と思いたまうべきなり。喜ぶべき心をおさえて喜ばせざるは煩悩の所為（しよい）なり。然るに仏かねて知ろしめして煩悩具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけりと知られて、いよいよ頼もしく覚ゆるなり」

と仰せられる。そのかくの如き我等とは、喜ぶべき心をおさえられて喜べぬ煩悩の塊、それが私でありますが、私は人間という姿をしてはおりましても心は全く猫と同様であります。

猫は、自分で猫であると知らず、御恩を喜ぶことも知らず、ただ鼠が欲しいだけ、日向ボッコがしたいだけでありますが、私はその猫同様に煩悩具足の身であってもそれと知らず、仏のお慈悲があっても喜ぶことも出来ず、ただ目の先の安逸と贅沢をむさぼるばかりであります。時には喜ぶことがあっても、自分の煩悩の満足を喜ぶだけで、それが出来ぬと不足に思い愚痴をこぼす。そうしたことを繰り返すばかりで、むなしく過ごしております。幸いに歎異鈔を読んでもこの猫は、それを鼠にしてしまい、淋しい時、苦しい時、それを逃がれようがために——日向ボッコがしたいために、歎異鈔を弄ぶだけであります。

ところが、歎異鈔は一体何を教えられるのでしょうか。

「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業を持ちける身にてありけるを助けんと思しめし立ちける本願のかたじけなさよ、と御述懐候いしことを、今また案ずるに、善導の、自身はこれ現に罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に沈み、常に流転して出離の縁あることなき身と知れという金言に少しもたがわせおわしまさず。さればかたじけなくもわが御身にひきかけて、我等が身の罪悪の深き程も知らず、如来の御恩の高きことをも知らずして迷えるを思い知らせんがためにて候いけり」

と、私が鼠を捕り、日向ボッコしか出来ない猫であることを思いしらしょうがためでありました。

それなのに「如来の御恩ということをば沙汰なくして、われも人もよしあしということをのみ申し合えり」で、口では念仏申していても、踊躍歓喜の心もなく、理屈では仏の御恩ということを云っていても、喜ぶ心はなく、ただ、目の先の欲にかかりはてて、勝った敗けたを争い、よいの悪いのということばかりにかかり果てて、自分が煩悩の塊りの浅間しい身とは知らないのですから、私は全く猫と同じものであります。

そのそくばくの業を持っている猫の私を、かねてしろしめされて、猫よ、と呼んで下さるのが本願でましました。まことに「煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのことみなもてそらごとたわごとまことあることなき」——猫であっても猫であることさえ知ることの出来ない猫の世界——でありますが、その猫に「猫よ」と喚びかけて下さり、差し向けて（御廻向して）下さる智慧の念仏だけが、「ただ念仏のみぞまことにておわします」、まことの世界であるぞと、聖人は仰せられるのであります。

しかし聖人はわが御身にひきかけて「かくの如き猫が親鸞である」と名告られて、無自覚で、如来の御恩も知らない私に、深い迷いの夢を醒ましてやろうとの仰せでありま

した。

それなのに、それほど深い御恩を蒙りながら、それを喜ぶことも出来ず、どこまでも煩悩にかませて、鼠が欲しくまたしても日向ボッコがしたくて、昨日も今日も迷い続けているのであります。

「久遠劫より流転せる苦悩の旧里はすてがたく、いまだ生れざる安養の浄土は恋しからず候こと、まことによく煩悩の興盛に候にこそ……」

で、持って生れた猫の性分はどうしても捨てられず、その猫を喚びかけて下さる御真実に対しても、嬉しいとも思わず、突いても引いてもどうにもならない身であります。

ああ「まことに如来の御恩ということをば沙汰なくして我も人もよしあしということをのみ申しあえり」で、空しく月日をすごし、そのうちに死なねばならぬ私でありますが、そうした私に、

「名残り惜しく思えども娑婆の縁つきて力無くしておわるとき、彼の土へはまいるべきなり。急ぎ参りたきこころなきものを、こことにあわれみたまうなり」

と、聖人は私の手を執って、私に猫であることを教え、その私をことに憐れんで下さる本願のましますことをお知らせ下さるのであります。御和讃に

智慧の念仏うることは、法蔵願力のなせるなり

信心の智慧なかりせば、如何でか涅槃をさとらまし

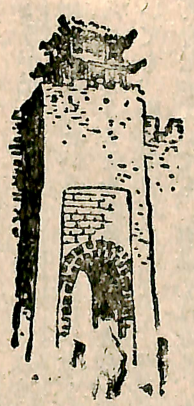
とありますように、不思議にもこの本願の力で、コノ猫が猫であることを知らせてもらい、本願にあうて智慧の念仏をたまわり、往生成仏の大利を得させて下さるのであります。

煩悩具足と信知して、本願力に乗ずれば
すなわち穢身すてはてて、法性常楽証せしむ

本願力の不思議によって、煩悩具足の猫は猫のままで、それを知らせて項いて久遠の光りに抱かれ、成仏せしめられるのであります。

幸に念仏を申しながら「猫であるぞ」とお呼び下さる本願を忘れ、また猫である身をも忘れておりはせぬかと、歎異鈔は私のために悲歎の涙をそそいで下さるのであります。この書、この導きによりまして、この浅間しい猫も生かされるのであります。

南無阿弥陀仏



われとわれらの救い

花田正夫

聖人の常の仰せに（歎異鈔総結文）

「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなり、……」

とある。同時に（歎異鈔九章）

「しかるに仏かねてしろしめして!!煩悩具足の凡夫!!と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくの如きのわれらがためなりけりと知られていよいよ頼もしくおぼゆるなり」

とも、（歎異鈔三章）

「煩悩具足のわれらはいずれの行にても生死を離るることあるべからざるを憐みたまいて云々」

と仰言っている。

信仰はもとより、ひとりしのぎの法でなければ無力である。いよ〳〵となれば外からつけた着物はみな木枯に散る紅葉のように消える。真に力になり頼みとなるのは唯如来に善悪こえて直結された一人である。近角先生は「今日の無事をよろこぶだけの信心は不徹底である。今日の無事は何時こわれるかわからないから」と云われている。

「親鸞一人がためなりけり」には、庭の置き石でなくて地下の岩盤、地殻から生えぬいた巌のたしかさがある。しかもそれは、聖人が誇張して無理に一人がためと仰言ったのではなくて、「慈眼もて衆生をみそなわし、一子の如く憐愍（れんみん）される」仏陀のまことをそのままますなをに頂かれたもので、夏は暑く冬は寒く、氷は冷たく火は熱いということと同じである。そしてそのように頂かれたのも、こちらの対度如何によらず、常に仏陀が慈愍して下さる、その遠い宿縁のたまものであるとおよろこびになっている。

昨年亡くなったヘレンケラー女史が「盲で聾（つんぼ）で唖（おし）の私には外からの教師は不要である。障りの多いこの身になくてはならないのは、今一人の私である」と常に語っていた。これは女史のために献身され、目となり耳となり口となって同心一体となって苦労された家庭教

「今一人の私」

師のサリバン女史への満腔の感謝の声であった。聖人の感謝も、智目（ちもく）行足（ぎょうそく）を欠く身に蒙むる釈迦弥陀二尊の善巧（ぜんぎょう）と三国七高祖方の慈育をわが身一つにうけられた御述懐である。

さて、自分自身が問題になっても、それが不徹底であると、われと共にわれらの救いという世界が開けないで、われ心得顔のひとりよがりにおわる。一般に信仰は主観的なところに出発することはよく知られているが、それが唯主観にとどまって客観の世界が開けないと、所謂小乗（しょうじょう）仏教にとどまることになる。このことを仏教ではきびしく誡められて「それは地獄におちるよりもおそろしいことである、地獄では苦しいからそこを出る道を求めるが、独善者はもうそこで死骸同様に終る」とある。

憶うに、釈尊が三十五歳の十二月八日の暁の明星の輝く頃、菩提樹下で成道（じょうどう）せられ、大覚（だいかく）の位に入られたが、その時、しばらく「この法を説いても誰も分ってくれないばかりか、そしるであろう。むしろこのまんま何も説かないでおこうか」とお考えになった。然し多くの天界の人々が集って、説法をお請い申したので、ついに転法輪（てんぽうりん）をはじめられ、八十御入滅の日まで、法灯を掲げて倦まずたゆまぬ御導きをせられたのである。

ここでは天人の懇請というようになっているが、これは釈尊のしばらくのためらいの中に、わが道が同時に一切人の道であるとの大自覚を得られ、その御生涯はその実証であったと思う。

さてわが道が同時に一切人の道、特種人の道から一般人の道と転ずるには、そこに大変な問題がひそんでいる。即ち釈尊の胸の中に、老小善悪、智愚貴賤の一切人がおさめられる、言いかえれば、どんな人々の身にも同（どう）じて下さる、釈尊の御心から一人の衆生でもはみ出すのであれば、その道は狭い、限りある道であるが、釈尊はそこに一切の衆生をのこらず胸におさめられたのである。

憶うに仏のさとりの世界は、遠く地上を離れて高根にのみ輝くのでなく、十の境涯（地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、声聞、縁覚、菩薩、仏界）を一切胸におさめられてどんな者にも全分の理解をもって同心して下さる、自由自在な広大無辺の大心海である。伝教大師の歌に

鷲の山高嶺にのみと思いしにわが立つ杣（そま）に
有り明けの月

とあるのも、御自身が仏心によって全理解されたことを見出されたよろこびの歌である。

一切人を理解して胸におさめられることは、一切人が仏と同じさとりの道に入り得ることを見抜かれたからであ

る。釈尊お一人の道でなく、万人普遍（ふへん）の公道がそこにある。これあって始めて、一切人に向っての転法輪がはじまったのである。

私はこうした仏界の秘奥（ひおう）を知る由もないが、歎異鈔に導かれているうちに、はじめ親鸞聖人のお言葉として読み続けていると、不図、聖人の仰せがそのまま私のことである、聖人は私の代辯者である、というように聞こえて来はじめた。それは私が賢くなったのではなくて、聖人が私になりきって同心（どうしん）して下さるので、自然にそう気付くようになったまでである。島根の妙好人、浅原才一翁のうたに

わたしのこころが、あなたのこころ
あなたのこころが、わたしのこころ
わたしがあなたになるのでないが
あなたがわたしになるこころ

とある。もとよりあなたとは、如来、聖人である。こちらがえらくなって近づいたのではなくて、あなたがわたしになって下さることのありがたさである。

こうした不思議を私共が味わえることは、われとわれらの救いを確信される聖人の信徳の自然の浸透である。この確信があってこそ、歎異鈔二章の結びに、

「愚身の信心におきてはかくのごとし。このうえは念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも面々のおんはからいなり……」

とも、同鈔六章に

「つくべき縁あればつき、はなるべき縁あればはなるることのあるをも云々」

と言い放たれて、広大無辺の如来の御はからいの御手にまかしきられている。

われ一人の救いをおいて、単に万人の救いを説かれたのでは、それは空論である。またわれ一人にとまって、万人の救いがひらけないでは、独善の洞窟に閉じこめられる。

われがそのままわれら、われらがそのままわれと円融無碍に信味させて頂けるのも、私にとっては聖人のお導きのお蔭である。

終りに私事で恐縮だが、私には子が無く、六十五歳になり、家内も六十近くなった。やがてどちらかから別れねばならぬが、それについて、私一人を救うて下さる阿弥陀仏は、家内をも必ずお救い下さる。私は救われるが家内はほっておかれる仏ではないと確信している。これあってこそ、娑婆の縁のつきる時、今生夢のうちのちぎりが、来世さとりのまえのえにしと転じて、さようならを言い得るのである。もしこのお誓いがなければ、死ぬことも、同時に生きるやすらぎも得られないままで、終らねばならぬ、幸にこの教にあいえたことはかえがたいよろこびである。

訓

あとがき

いよ〳〵きびしい暑さになりました。暑中御見舞申上げます。

さて八月は常音先生の御忌月でありますが、本年は七月号に先生の御法話を大字さんのお蔭でここに掲げさせて頂きました。柳瀬様の常音先生の真面目を頂きましたこともありがたいことです。又松村さんの七十三の一里塚を頂きました。

児玉さんは私の京都の学生時代の友で、広島市で医師会の福会長。「医道」を提唱されています。心の旅は、看護学校の刊行物に発表せられたものから頂きました。

「われとわれらの救われる道」を仏陀降誕の聖月に深く教えられましたので一文を草しました、

御高覧下さい。

推せん図書

「人生隨想」柳瀬留治著。定価五百円。
発行所、東京都渋谷区代々木五ノ一ノ十七
短歌草原社、振替東京三五六三三

自序、

本書は私の折にふれて書いた随想を輯めたもので、自分の体験から人生にどう徹して生きるかの問に答えたものである。私は貧しい農家に生れ、体も心も弱く、どう生きて行くかに悩んだ末、宗教による精神的支えがないと立てないと思つた。二十歳頃たまたま清沢満之師の「精神主義」を読み、且つ近角常観先生の「人生と信仰」を読み、自身さえ立てば生き得る自信をもち、上京し近角先生の教えを乞うた。そして苦悶七年、初めて先生の説かれる信仰に醒めた。それからが私の人生の発足である。仕事に身が打込め、勉強も出来る、好きな作歌も、はては命がけ登山も出来るようになつた。本書は折々に書いた随想で、歌誌の四十周年に当り、集めて一書とし、世の心ある方々に訴えんとして刊行するものである。

私の信念は、人生にも芸術にも絡み合つて現われるが、前篇は人生を主とし、中篇は芸術的色合のものを以つてし、後篇は宗教信仰の吐露を目して編んだ。

四十四年二月　柳瀬留治

御案内

○毎月第一、二、三日曜、午後一時半、一道会例会
市電、新郊通り一丁目下車。東入ル三筋目左入ル。
名鉄、呼続下車。徒歩二十分。

○

○毎月二十四日、午前午后。昭和区小桜町教西寺、法話会。
市電、御器所通り下車。桜花学園東側
市バス、北山町下車、東へ一丁。

定価　半年　二百五十円（送共）
　　一年　五百円（送共）
編集・発行人　花田正夫
名古屋市南区駅上町二ノ八八
電話八二一局七〇三七番
印刷人　吉野穂志郎
愛知県西加茂郡三好町大字福谷
発行所　慈光社
名古屋市南区駅上町二ノ八八
振替口座名古屋一〇四七〇番
郵便番号四五七

慈光第二十一巻第七号　昭和四十四年七月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年十一月二十三日第三種郵便物認可